

基礎研究B(15H0364)

教師養成、現職教員の協働によるアクション・ラーニング研修プログラムの開発  
成果報告書

# 2016年台湾における教育行政 及び小・中・高等学校の現状

2016年3月16日～18日

佐藤 豊 桐蔭横浜大学 教授

Yutaka Sato, Toin University of Yokohama Department of Sport Education Professor

木原 慎介 東京国際大学人間社会学部 専任講師

Shinsuke Kihara Tokyo International University Human and Social Sciences Lecturer

清田 美紀 広島県教育委員会スポーツ振興課 指導主事

Miki Seida Hiroshima Board of Education Teachers'consultant

四方田 健二 名古屋学院大学 講師

Kenji Yomoda, Nagoya Gakuin University, Lecturer

大津 展子 茨城大学 講師

OTSU NOBUKO Ibaraki University Lecturer

青木 哲也 福岡教育大学大学院教育学研究科教職実践専攻 教授

Tetsuya Aoki FUKUOKA UNIVERSITY OF EDUCATION Professor

吉野 聡 茨城大学 准教授

YOSHINO SATOSHI IBARAKI UNIVERSITY ASSISTANT PROFESSOR

本多 荘太郎 福岡教育大学

Sotarou Honda FUKUOKA UNIVERSITY OF EDUCATION ASSISTANT PROFESSOR

## I 概要

本報告は、課題研究のテーマである「教師養成、現職教員の協働によるアクション・ラーニング研修プログラムの開発」の試みとして、本研究の対象である保健体育ネットワーク研究会と海外教育関係者との授業実践者間交流を促進すること、台湾市内の小中高の学校訪問を通して、台湾保健体育の授業の情報収集を行うこと、台湾文部科学省における学習指導要領改訂の動向を調査することをねらいとした。

まず、台湾教育部体育署(日本のスポーツ庁に該当)の訪問(5p~13p)によって得た情報を述べる。

体育スポーツ政策白書(2013.9)では、今後の体育スポーツ行政に関する施策や組織に関する10年計画を打ち出し、「生涯スポーツ」、「競技スポーツ」、「スポーツ産業」柱として施策立案をしている。中でも、学校体育については、後述する「3・3・3運動」から「SH150」への施策転換が最も印象的である。

台湾の学校体育・スポーツ行政及び初等中等教育の目標は、「学校体育の活性化と子どもたちの活力向上」である。これらを担う体育教師および専任スポーツ指導者は、学校体育統計年報(2015)によると、小学校で体育授業を担当する教師の約60%は、体育を専門としていない(体育学士を有さない)という現状があり、同様に中学校では約5.6%、高等学校では約2.9%、大学では約2.2%が体育を専門としていない(体育学士を有していない)。そのため、各学校には専任スポーツ指導者を配置する制度があり、専任スポーツ指導者の内、体育関連学部を卒業(体育学士を取得)している割合は、小学校で約55.4%、中学校で約92.8%、高等学校・専門学校で約94.6%、大学で約97%となっている。

体育カリキュラムおよび体育授業について、1週間当たりの体育授業の平均実施時間は小学校が約74分、中学校が約91.8分、高等学校が約104分である。

また、各学校段階で最も多く行われている体育的活動は「運動会」であり、運動部活動・クラブについては、各学校に設置されているスポーツ代表チーム(運動部)は、1校あたり平均して小学校が4チーム、中学校が5チーム、高等学校が5チーム、大学が17チームある。一方、スポーツクラブについては1校あたり平均して小学校では4クラブ、中学校では5クラブ、高等学校では6クラブ、大学では10クラブが設置されている。

エリートスポーツ選手を育成システムは、四段階ピラミッド構造のシステムを設けている。学校体育統計年報(2015)では、体育クラスを設置している学校数は、小学校で181校、中学校で311校、高等学校で140校である。また、障害者体育4年計画(2016~2020)において、障害者にとってやさしい環境作りを進め、スポーツ参加へのバリアフリー化を重視している。

現在、「学校体育の活性化と子どもたちの活力向上」という学校体育の目標を達成させるため、三つの中核指標と、短期・中期・長期目標をそれぞれ設定している。以下は、特筆すべきポイントである。

### ・中核目標

- i 体育に関する法令の整備と体育教師およびスポーツ指導者の育成・管理の遂行
- ii 体育カリキュラムの多元化と体育授業を行いやすい環境作り
- iii 児童生徒の興味関心にあった体育授業の展開、身体活動量の増加、生涯にわたる運動習慣の定着

### ・短期目標(2013-2015)

児童生徒に基礎的・基本的なスポーツの素地を身に付けさせ、体育授業以外の運動実施時間を1週間に150分以上とし、体力測定合格率を年間2.5%ずつ増加させる。さらに、体育教材の多元化と情報蓄積(Web)の充実化を進める。

### ・中期目標(2016-2019)

各学校における体育専門教師の割合を小学校で 50%、中学校で 95%、高校 98%以上にする。

・長期目標（2020-2023）

体育授業「標準モード」認証制度によるライセンス取得者をさらに増やし、各学校における体育専門教師の割合を小学校で 60%、中学校で 98%以上にする。

これらの情報をもとに、新北市文徳国民小学(小学校に該当) (14p~16p)、新北市立鷺江国民中学(中学校に該当) (16p~19p)、台北市立中山女子高級中学(高等学校に該当) (19p~22p)を訪問し実態を調査した。

文徳国民小学は、児童数約 3000 人の SH150 のモデル校であり、4 つのプログラム（「ラジオ体操」、「ジョギング」、「なわとび」、「エアロビクス」）を実施している。教師へのインタビューでは、1 週間に 150 分の時間確保は負担ではあるが、結果として、子供たちは、スポーツの楽しさ、体を動かす楽しさを十分感じている(清田)。

鷺江國中学校は、生徒数 1500 人であり、130 人の教職員のうち、28%の教師が教育学修士を有する。特筆すべき取り組みとして、研修システムの実際を紹介していただいた。新北市では 9 地区から 1 人ずつの保健教育および体育教育の代表教員が研修チームを組織している。研修チームの教師は平均 18 年の教職経験、研修チーム加入後平均 8 年の経験を持つ。研修チームは毎週水曜日に集まり研修の実施計画の検討および準備を行っている。研修チームは月に 1 回程度、保健または体育領域の研修会を開催している。参加教員は、他地区の学校の授業を参観し、所属校や所属地区で新しい授業実践を普及させている。2016 年 5 月からは、午前中に参加教員で主題について議論し、午後に生徒に対し授業を実践し成果を検証するという方法で実施される。授業では、観察評価票を用いてペアの生徒同士での相互観察を行うなど、認知学習場面を意図的に設ける工夫が見られた(四方田)。

臺北市立中山高級中學は、生徒数約 3000 名の女子校であり、財政界をはじめとする著名人を多数輩出している。スポーツ種目は、全体の 50~70%で、バレーボール・ゴルフ・バドミントン・水泳・ダブルダッチを行っており、それに加え特徴的な 4 つの分野は 30~50%で行われている。種目の担当教員は、その種目の指導ライセンスを持っている教師が担当している。

「運動は大切」「積極的に運動に取り組もう」といった雰囲気があり、校長先生をはじめとする先生方が積極的であることが、生徒が運動を肯定的にとらえる一歩になっている(大津)

本訪問先は、台湾師範大学との連携により実現した訪問地であり、台湾体育科教育学会会長の林教授、国際スポーツ教育学会理事のチンウエイ准教授等との研究協力がなされ、政府のパイロット校の視察であるため、先進的な取り組みとして捉えておく必要があるが、台北近郊の都心部では、大規模校が多く教職員が多いことをメリットとして様々な取り組みが実践しやすいとの印象がある。

また、各学校の教職員は、英語力が高く通訳を介さず説明してくれる場面が多い。台湾においては、国際化及び高学歴化が進んでいると感じる。

また、健康の保持増進に向けた体育・スポーツ施策は、しっかりしており学校と大学との連携が進んでいる印象を感じた。

## Ⅱ .訪問場所及び日程

- I 台湾教育部体育署 台北市中山區朱崙街 20 號 / +886 2 8771 1800  
 II 台北市立中山女子高級中学 台北市中山區長安東路二段 141 號 / +886 2 2507 3148  
 III 新北市立鷺江国民中学 新北市蘆洲區長樂路 235 號 / +886 2 8286 2517  
 IV 新北市文徳国民小学 新北市板橋區英士路 179 號 / +886 2 2257 7193

		3/17 (Thu)		3/18 (Fri)	
		AM) 文科省訪問	PM) 高校訪問 台湾師範大学	AM) 小学校訪問	PM) 中学校訪問
		起床 朝食		起床 朝食	
8:00					
	30				
9:00					
	30				
10:00					
	30				
11:00		10:00 台湾教育部体育署		10:00 新北市文徳国民小学	
	30				
12:00		昼食			
	30				
13:00					
	30	13:30 台北市立中山女子高級中学			
14:00				14:00 新北市立鷺江国民中学	
	30				
15:00					
	30				
16:00					
	30				
17:00					
	30				
18:00		17:30 台湾師範大学体育科教育関係者 情報交換会			
	30				
19:00					
	30	台湾師範大学 大学院での視察者紹介及び佐藤講演			
20:00		20:30 finish communication			

### III. 訪問の記録

#### 1. 台湾教育部体育署（台北市中山區朱侖街 20 號）

- ・視察日 2016年3月17日（木）10:00～12:00
- ・説明者 葉丁鵬局長ほか2名（体育署）、林靜萍（台湾師範大学教授）、施登堯（台湾師範大学副教授）
- ・通訳者 林郁偉

#### 1. あいさつ（葉丁鵬局長）

2014年の日本への視察（文部科学省、川崎市立上作延小学校、墨田区立竪川中学校、神奈川県立平沼高等学校）に際しては、受け入れと対応を賜り感謝する。本日は、台湾の学校体育に関するプレゼンを行うので、ぜひみなさまのご意見を頂きたい。台湾の学校体育は、まだまだ日本に見習わなければならないことが多い。したがって、今後ともお互いにより関係を持たせて頂ければ幸いである。

#### 2. 体育署からの説明概要

- |                 |    |
|-----------------|----|
| (1) 教育部体育署の組織概要 |    |
| (2) 学校体育の目標     |    |
| (3) 学校体育の現状     |    |
| (4) 学校体育の発展戦略   |    |
| (5) 中核指標        | 2) |

##### (1) 教育部体育署の組織概要

体育署は、署長（局長）、副署長（次長）の下に、主任秘書（審議官）を置き、6課（総合企画課、学校体育課、生涯スポーツ課、競技スポーツ課、国際・中台スポーツ課、スポーツ施設課）4室（秘書室、人事室、会計室、監察室）で構成されており、ナショナルトレーニングセンターも管轄している（図1）。3)

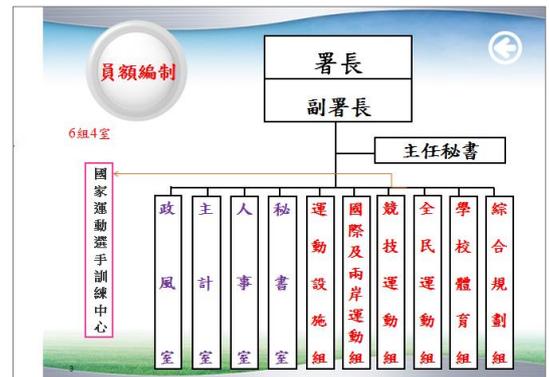


図1 教育部体育署の組織

##### (2) 学校体育の目標

###### ①学校体育の価値

学校体育の価値は、元々は「身体活動」ということのみであったが、社会変化に伴って、「全人教育に不可欠な要素」や「生涯にわたり学習する権利」、さらには「競技スポーツの基礎」、「国民健康の基盤」や「文化継承の場」といった多様な価値を含むようになってきている（図2）。

現代の社会生活における各種の健康問題と運動スポーツとの関連性は国際的にも注目されている。したがって、学校体育の推進は、国民の健康と競技スポーツの発展に



図2 学校体育の価値

寄与するものと考えている。4)

## ②学校体育の目標

2013年(民国102年)9月に「体育スポーツ政策白書」が公布され、その中では「学校体育の活性化と子どもたちの活力向上」という学校体育の目標が掲げられた。その目標を達成するためには、体育行政に関する法令や組織体制の整備、学校体育の専門的人材の育成、学校体育基盤の充実、国民の運動習慣の確立と生活の質の向上などが必要不可欠であるとしている。5)

## (3) 学校体育の現状

### ①体育行政に関する法令および組織

学校体育に関する法令は、一般、スポーツ大会(イベントを含む)、体育クラス(体育科)、専任スポーツ指導者、奨励、補助の大きく6項目に分類されており、各教育政策と関連付けながら修整・改善を図っている。7)

一方、学校体育に関わる行政組織は、中央に教育部体育署学校体育課が設置され、県市には各自治体の教育局・教育所体育保健課が設置されている。また、各学校には体育部、各大学には体育室が設置されている。さらに、民間組織として台湾大学体育総会、台湾高等学校体育総会、各県市の中学校・小学校の体育促進会が設置されている。8)

### ②体育教師および専任スポーツ指導者

小学校では包班制(学級担任制)が採用され、体育を専門としていない教師でも体育授業を担当している。一方、中学校、高等学校、大学では教科担任制が採用され、体育授業を担当している教師のほとんどが体育を専門としている教師である。

2015年の「学校体育統計年報」によると、小学校で体育授業を担当する教師の約60%は、体育を専門としていない(体育学士を有さない)という現状があり、同様に中学校では約5.6%、高等学校では約2.9%、大学では約2.2%が体育を専門としていない(体育学士を有していない)。9)

また、各学校には専任スポーツ指導者を配置する制度があり、これは台湾の学校体育の特色の一つとなっている。この制度は、ライセンスや研修に関しては各スポーツ協会の管轄、制度の規則や審査に関しては政府の管轄、実際の採用に関しては各学校の管轄といったように、各機関がそれぞれの役割を担って進めている。この専任スポーツ指導者の任用ルートは二つあり、一つは、各学校が独自に行う方法で、学校職員としての身分となる。もう一つは、教育部または各自治体が行う方法で、外部指導員としての身分となる。10) 実際に採用された専任スポーツ指導者の内、体育関連学部を卒業(体育学士を取得)している割合は、小学校で約55.4%、中学校で約92.8%、高等学校・専門学校で約94.6%、大学で約97%となっている。11)

### ③体育カリキュラムおよび体育授業

カリキュラムに関しては、1週間当たりの体育授業の平均実施時間は小学校が約74分、中学校が約91.8分、高等学校が約104分である。また、大学では二年次まで体育は必修科目となっており、三年次以降は選択科目となっているところがほとんどである。12)

体育授業を担当する教師は、ほとんどが体育関連学部を卒業(体育学士を取得)した教師だが、小

学校の場合はその限りではない。また、体育授業は、小学校から高等学校においては主に児童生徒の所属するクラス単位で実施しており、大学においては学生の選択種目ごとにクラス分けをして実施しているところが多い。実際の体育授業で扱う教材や指導方法は各教師に任されており、学校の施設環境に応じた内容ということになるのだが、比較的、球技系スポーツがよく取り上げられている。13)

#### ④体育的活動および運動部活動

2015年の「学校体育統計年報」によると、各学校段階で最も多く行われている体育的活動は「運動会」であった。次に多く行われている体育的活動は、小学校および中学校では、地域の学校対抗スポーツ大会であった。体育的活動に関連し、教育部が2007年より推進している施策には、「快活（元気いっぱい）計画」、「子どもの体力向上計画」、「小中学生の運動普及計画」、「自転車推進計画」、「水泳及び海洋スポーツ教育推進計画」、「大学体育授業の評価に関する施策」などがある。14)

運動部活動・クラブについては、各学校に設置されているスポーツ代表チーム（運動部）は、1校あたり平均して小学校が4チーム、中学校が5チーム、高等学校が5チーム、大学が17チームある。一方、スポーツクラブについては1校あたり平均して小学校では4クラブ、中学校では5クラブ、高等学校では6クラブ、大学では10クラブが設置されている（図3）。15)



図3 運動部活動・クラブ

#### ⑤エリートスポーツ選手の育成

エリートスポーツ選手を育成するため、四段階ピラミッド構造のシステムを設けている。第一段は、小中学生期の「基礎トレーニング所」でタレント発掘と育成を図る段階である。そこから優秀な選手を選抜し、高等学校・専門学校の体育クラスに進学させるのが第二段である。さらに、選抜されたエリート選手を大学に進学させながらナショナルチームの予備軍として専門トレーニングを受けさせるのが第三段である。そして、最終段階では、トップ選手をナショナルチームに入れ、オリンピックやアジア大会などの主要な国際大会に向け、長期的なトレーニング計画を組んでいくというシステムである（図4）。16)

2015年の「学校体育統計年報」では、体育クラスを設置している学校数は、小学校で181校、中学校で311校、高等学校で140校あると発表している。17)

また、現在、台湾には「国立台東大学附属体育高等学校」、「花蓮県立体育実験高等学校」、「国立体育大学（桃園市）」、「国立台湾体育運動大学（台中市）」という体育専門の高等学校や大学がある。18)



図4 選手育成の四段ピラミッド構造

#### ⑥アダプテッド体育（障害者スポーツ・障害者体育）

障害のある児童生徒のスポーツ参加と体力向上を目指し、これまでに、障害者体育授業実施計画の

改訂・推進(1994～1998)、障害者体育授業の中期的発展計画(1999～2003)、障害者体育発展方案(2003～2015)、障害者体育4年計画(2016～2020)といった施策展開をしてきている。障害者にとってやさしい環境作りを進め、スポーツ参加へのバリアフリー化を重視している。19)

#### (4) 学校体育の発展戦略

##### ①学校体育行政に関する法令・組織・システムの整備

このことに関しては、「学校体育実施法」、「学校体育クラス設置法」といった法令の検討・改善や、各自治体と教育サポートチームとの連携による体育授業の質向上を図っていく。さらに、各学校のスポーツ選手を対象とした管理・サポートや視察訪問システムの構築、すなわち、各学校の体育クラス、専任スポーツ指導者、大学スポーツ特待生に対する評価・サポートシステムを定めていく。20)

##### ②体育専門教師の育成および研修

このことに関して、特に小学校においては、体育授業を担当する教師のための指導モジュール作成や指導力向上、体育専門ではない教師に対する「健康体育専門領域」研修(教育部教師育成計画の一つ)への参加を奨励していく。

また、専任スポーツ指導者に対しては、専門的知識や技能の更なる向上とそのサポート強化を図る。具体的には、大学の資源をうまく活用しながら、資格認定、任用管理、評価、給料待遇、異動等のシステムを整備していく。21)

##### ③体育カリキュラムと体育授業の質向上

教師の持続的な授業スキル向上と、特色ある体育カリキュラムや教材・教具の開発が求められる。このことに関して、各学校においては、カリキュラムと授業を連動させるべく、カリキュラム開発委員会を設置することが望まれる。また、教材・教具については、各教師のアイデアを促しながら、台湾の特徴を生かしたものを開発し、その多様化を図っていく。22)

##### ④体育的活動や運動部活動の質的向上と量的拡大

このことに関して、具体的には、児童生徒の身体活動量の増加、体育的活動の日常的な実施、スポーツイベントの普及・推進、スポーツクラブへの加入率増加、スポーツ代表チーム(運動部)の設置と競技システムの整備などを進めていく。23)

##### ⑤エリートスポーツ選手育成システムの強化

このことに関しては、スポーツ障害予防・ケアに関する基盤を確立させていく。具体的には、各学校と連携を取りながらスポーツ科学・医療サポートを行い、トレーニングに関する専門的知見や大学の資源等をうまく活用して、その効果を上げていく。24)

また、「選抜—トレーニング—競技—サポート」を一貫化した育成システムを構築する。具体的には、体育クラスに所属する選手に対して評価を行い、例えば、不適格と判定された選手については体育クラスから除籍するなどの措置を取りながら、優れた選手を精選し、地域との連携の中で小学校から大学までの16年間一貫の育成システムを作る。25)

## ⑥アダプテッド体育の充実

障害者体育教師に関しては、指導力向上計画を実施し障害者体育に関する専門性を向上させることと、障害者体育の専門知識を持つ教師を任用し授業の質を向上させることの二つのアプローチで強化を図っていく。26)

障害者体育の指導計画に関しては、国、学校、教師がそれぞれに直面している課題（実態）に応じた障害者体育カリキュラムや個別の指導計画（IEP）等を開発・展開していく。27)

障害のある児童生徒のスポーツ参加に関しては、放課後のスポーツクラブあるいは運動部活動への参加を支援すると同時に、スポーツ参加への障壁を解消し、その参加率を上げていく。28)

障害のある児童生徒の体力向上に関しては、身体活動時間と運動量の倍増計画を推進し、学校や地域にある運動資源（施設や人材など）をうまく活用しながら、体育的活動の多様化と体力向上を図っていく。29)

## (5) 中核指標

「学校体育の活性化と子どもたちの活力向上」という学校体育の目標を達成させるため、三つの中核指標と、短期・中期・長期目標をそれぞれ設定した。30)

### ①中核指標

- i 体育に関する法令の整備と体育教師およびスポーツ指導者の育成・管理の遂行
- ii 体育カリキュラムの多元化と体育授業を行いやすい環境作り
- iii 児童生徒の興味関心にあった体育授業の展開、身体活動量の増加、生涯にわたる運動習慣の定着

(図 5) 31)



図 5 三つの中核指針

### ②短期目標（2013-2015）

- i 学校体育に関する評価・サポート機能を設け、奨励・補助施策も定める。
- ii 小学学校体育教師の指導力向上研修を計画的に実施し、各自治体における体育専門ではない（体育学士を有さない）教師の研修会参加率を 80%にする。32)
- iii 児童生徒に基礎的・基本的なスポーツの素地を身に付けさせ、体育授業以外の運動実施時間を 1 週間に 150 分以上とし、体力測定合格者を年間 2.5%ずつ増加させる。さらに、体育教材の多元化と情報蓄積（Web）の充実化を進める。33)
- iv 各自治体における地域スポーツ選手育成システムを支援し、大学が持つスポーツ科学等の資源を活用しながら、16 年間一貫の選手育成を進めていく。34)
- v 障害者体育教師の育成と指導力向上研修を進めながら、障害のある児童生徒に対して専門的な体育授業を実施できる教師を増やす。さらに、障害のある児童生徒のスポーツクラブ加入率およびスポーツ参加率を上げる。35)

### ③中期目標（2016-2019）

- i 各自治体と教育サポートチームとが連携を図り、体育行政、体育教師、スポーツ指導者、ボランティアなどの地域の特色に関する研究推進指定校（1年間）を定める。36)
- ii 小学校の包班制（学級担任制）では、体育専門でない教師が体育授業を担当していることが多いことに関して、自治体が学校と協力し、専門的な体育授業を実施できる（体育授業「標準モード」認証制度にてライセンスを取得する）教師の増員とデータベースの作成を進め、各学校における体育専門教師の割合を小学校で 50%、中学校で 95%、高校 98%以上にする。37)
- iii 体育カリキュラムと授業教材の開発を進める。
- iv 地域スポーツ選手育成システムの拡大、大学のスポーツ科学的サポートの強化、地域スポーツ科学研究センターの設立、優秀スポーツ選手のデータベース化（競技成績やコンディショニング等に関して）を進める。38)
- v 各学校に所属する障害者体育教師の割合を 5%以上に増やす。また、障害のある児童生徒の運動意欲を向上させる。さらに、障害者体育のカリキュラムおよび授業の質を向上させる。39)

#### ④長期目標（2020-2023）

- i 体育授業「標準モード」認証制度によるライセンス取得者をさらに増やし、各学校における体育専門教師の割合を小学校で 60%、中学校で 98%以上にする。
- ii 児童生徒が一人一つの専門スポーツを持つ割合を 85%以上にする。40)
- iii 各地域の特色に応じて競技スポーツを発展させる。具体的には、「16年間一貫」の選手育成構想に基づいて、小学校から大学までの選手育成プラットフォームを実現させる。41)
- iv 各学校に所属する障害者体育教師の割合を 10%以上まで増やす。また、障害者にやさしい運動環境を整備する。そして、障害のある児童生徒の身体活動時間と運動量を増やし、肥満等の健康問題を解決していく。42)

※ 2)～42)はスライド No.

### 3. 補足説明（葉丁鵬局長）

過去、国の体育行政に関する組織には、「体育省」と「体育委員会」があった。後者の「体育委員会」は主にオリンピックにおけるメダル獲得を目標としていた。2012年のロンドン五輪にてその目標が達成された後、組織改革により「体育省」と合併し、現在の「体育署」となった。

また、2013年に公布された「体育スポーツ政策白書」では、今後の体育スポーツ行政に関する施策や組織に関する10年計画を打ち出し、「生涯スポーツ」、「競技スポーツ」、「スポーツ産業」という三つの柱に従い、様々な取組を進めているところである。

#### （パンフレットより抜粋）

台湾政府の体育スポーツに関する行政局は、1954年に教育部の中に設置された「国民体育委員会」（National Council on Physical Fitness and Sports : NCPFS）が最初である。その後、1973年に「教育部体育省」、1998年に「行政院体育委員会」（Sports Affairs Council : SAC）が設立された。その後の行政改革を経て、これまでの二つの組織が統合され、2013年に新たに「教育部体育署」（Sports Administration, Ministry of Education : SAMOE）が設立された。

教育部体育署（SAMOE）は、学校体育と民間スポーツ産業の事業や資源の統合により、より戦略的で効果的なスポーツ政策を遂行することが可能となる。このことは、台湾のスポーツがより包括的・総合的に発展していくことにつながるだろう。定期的に運動をする人口を増加させること、国内選手の養成・サポート、また、選抜、トレーニング、競技、カウンセリング、報奨等を含め、これらを連動させることで、台湾における競技スポーツの発展と国民スポーツ産業の活性化が十分に期待できる。

#### 4. ディスカッション（Q&A）

**Q 1** 二つのライセンス（小学校の体育ライセンス、障害者体育ライセンス）について、取得方法や取得に要する時間などの詳細を教えてください。

A まず、小学校の体育ライセンスについては、小学校の体育授業者はほとんど体育を専門としていないため知識等を欠いており、実際の授業では教科書のみを参考にしてスポーツをさせるだけで、ほとんど何も教えていないという現状がある。そのため、このような小学校教師を対象にした研修制度が設けられている。具体的な内容としては、体育署が作成した体育授業の標準的授業モジュールを身に付けさせ、これにより最低限の体育授業が実施できるようにするというのである。12時間以上の時間を掛けて実施されるこの研修では、体育授業の基本的な理論も勉強する。そうすることにより、研修で得たモジュールを基本としながらも、子どもたちや学校・地域の実態に合わせて応用的・独自の体育授業を行えるようにする、というねらいがある。

A 障害者体育ライセンスについては、まだ数は少ないが、台湾の大学に障害者体育を専門とする学部ができた。障害者体育に関して既に専門知識をもっている教師へは、更なる指導力向上を図るという研修システムもある。

また、先述の小学校教師の研修についての補足であるが、現在は、各自治体から指定された教師が研修を受けている。具体的には、中央で15時間の研修を受け、その後、それぞれの自治体に戻って12時間の自己研修と7時間の実技研修を行う、という内容を1つのパッケージとして実施していることがポイントである。

**Q 2** 国と各自治体との関係が大事という話であった。日本でも、例えば学習指導要領など作成物や情報などを地方や現場の先生などに情報を伝えていくのに苦労している。地域によっては財政力の違いなどがあつたりもする。そういった課題については、何か対策があるか？

A 台湾でも中央政府と各地方自治体との関係は非常に大切であると考えているが、なかには中央政府の施策がなかなか受け入れてもらえないケースもある。その対策として、次の三つの方法を考えている。一つ目は、Webを通じて現場の各教師にダイレクトに伝えるアプローチももつことである。二つ目は、国の予算支援により地方自治体との連携をより深めることである。三つ目は、高い指導力をもつリーダー的教師を養成し、その教師がハブ的役割を担って各自治体において施策・情報等を波及させていくことである。

**Q 3** 身体活動量を上げるという指標があるとのことであった。日本においても、国のメッセージは

各自治体や学校に伝わっていく過程の中で情報が固まり過ぎてしまい、例えば体力向上というメッセージを打ち出すと、良い授業というよりは数値を上げるためのトレーニングの授業という方向に陥りがちである。台湾においては、そのような心配はないか？

A 指標も様々あるが、それぞれに考え方が異なる。例えば、1週間に150分以上の運動時間を確保する（SH150）という指標には、四つの方針がある。一つ目は、これは法律レベルで規定しているものであるため、150分/週間以上というのはマストであるということである。二つ目は、この指標を達成させるための様々な実施案が体育署から提示され、各自治体はそれぞれの特徴に合わせて選択して実施できるようにしていることである。三つ目は、「国民体育の日」にメディアの力を活用しながら、学校、家庭、教師、子どもたちにその意識付けを図っていくことである。四つ目は、国の評価委員会による監視・指導システムがあることである。この委員会は、中等教育局や高等教育局など他局との連合で結成され委員会として、定期的に各自治体・学校を現場訪問し、それぞれの計画とその成果に関して評価・指導する役割を担っている。

Q4 運動実施時間の目標値等を示しているということであった。子どもの体力について、例えば台湾では元々低いとか、過去と比較して低下してきたとか、或いは高い子どもと低い子どもの二極化傾向があるとか、都市部と地方といった地域によって差異があるとか、そういった現状について教えて頂きたい。

A 2011年に台湾で子どもの体力測定を全面的に実施したところ、1999年の結果と比較して大きく低下していることが分かった。このことから、子どもの体力が徐々に落ちてきているのではないかと結論に至った。国は2012年に新しい体力測定種目を作成した（柔軟性、瞬発力、心肺持久力、筋持久力の4要素に分類されるもの）。その後、様々な行政施策が行われてきたが、「SH150」もその一つである。2012年に実施した体力測定では、体力レベル「中」以上が57%であり、目標値の50%を達成したことから、施策の効果があったものと考えている。

Q5 小学校の体育に関して、日本では小学校教師の約7~8割が女性で、体育が専門ではない教師がほとんどであるというのが現状である。台湾における、体育専門ではない教師に対してライセンスを取得させ、体育専門の教師を増やすという施策に対して、現場はどのように反応しているのか？その流れは定着しつつあるのか？

A 小学校におけるライセンス取得に関しては、体育の専門知識を持たない（体育学士を取得していない）教師の研修参加率を80%にすること、そして、体育の専門知識を持っている教師の割合を60%にすることを目標値として設定している。

Q6 「SH150」についての課題や成果等はどのような状況か？

A 「SH150」については、体育署としては、教員免許や教員研修を管轄している「教師育成司(局)」横の連携を強化しながら進めていきたいと考えているが、現実的には難しいのではないかと感

じている。

A 日本の皆様に対して、我々は台湾の良さをアピールしたいところではあるが、実際のところは課題も多い。例えば、急速な情報化や、子どもたちのスポーツ嫌いなどである。香港では、2000年に子どもの体力測定をスタートさせている。当時はまだ、台湾の方が子どもの体力が高く、関連する行政施策も進歩的だったと考える。しかし、2011年に両国を再比較したところ、台湾は香港より劣る結果となった。1990年~2015年に政府は様々な対策をしてきたが、子どもの体力は低下してきている。この現状に基づき、大学だけでなく国からも膨大な資源を投入し、その低下に歯止めを打ちたいという決意がある。現在、台湾の国民健康保険は世界1位であると言われているが、その背景には、国の膨大な予算投入がある。そのため、このまま子どもの体力低下が進めば、さらなる国の財政負担につながると考えられるため、この体力に関する問題は解決すべき必要性の大きい問題と捉えられているのである。子どもの体力向上対策としては、これまでには「3・3・3運動」というものがあった。これは、「1週間に3日以上、1回に30分以上、130拍を越える運動をしよう」という施策であった。しかし、その成果があまり見られなかったことから、現在では「SH150」へと施策転換をしているという経緯がある。

1週間に150分以上の運動時間を確保するための具体案としては、例えば、各授業間の休み時間を10分から15~20分へと拡大するといったように、1日の時程を柔軟に設定し、そのことで生み出した時間を有効活用することで、子どもたちがより運動をしやすくなるのではないかと、という考え方がある。また、学校施設に関しては、たとえ子どもたちが運動・スポーツをしたいと思っても、なかなか簡単に施設を利用することができないという問題がある。そのような子どもたちが施設を利用しやすいような環境作りをすることも、一つのアプローチであると考えている。以上のように、運動しやすい時間を作ること、そして運動しやすい環境を作ること、これらのごとによって、子どもたちの運動やスポーツを実施したい（しよう）という意欲が向上していくのではないかと考えている。

国内ではすでに何校かのパイロット校がこれらの取り組みを実験的に進めている。しかし、その取組期間が1年間に限定されていることから、具体的な成果を上げるまでには至っていない。今後は、縦断的な実践研究をしていながら改善を図り、その成果と体力測定によるビッグデータとの関連性を検証していくことで、効果的な体力向上が期待できると考えている。

文責)木原 慎介

## 2. 小学校

1)視察先：新北市板橋區文徳國民小学

2)日 時：2016年3月18日（金）10：00～11：30

3)説明者：校長 許 政順 他 6名

4)視察先の概要

約 100 クラス，児童数 3,000 人の大規模校である。

スポーツと文化活動をともに推進している。中でもスポーツについては，陸上，バドミントンの指導に力を入れている。また，伝統的スポーツ活動も推進している。授業実施後の課外活動については，10 を超える多様なグループがあり，スポーツ活動だけでなく，文化活動も行っている。

大規模校である強みを生かし，体育専科教員が9名配置されている。また，外部指導者1名，そして，非常勤の職員6名により，体育授業をサポートしている。



5)説明等の内容

(1) SH150 プログラム

① プログラム実施に至った背景

運動やスポーツを行うことは，学力向上，記憶力増進など，多くのメリットがある。学習成績の向上も期待できるとともに，ストレス発散もでき，心身ともに健康に過ごすためには，大変重要である。

台湾では，教育改革により，授業数が減少しており，体を動かす機会が減ってきている。さらには，放課後，塾に通う子供たちも多くおり，学校において，体を動かす時間を確保することが必要となってきた。

② プログラムの内容について

4つのプログラム（「ラジオ体操」，「ジョギング」，「なわとび」，「エアロビクス」）を実施。

全校児童が多いため，1～3年，4～6年に分け，時間や場所を工夫しながら行うようにしている。

ラジオ体操については，屋外や廊下で行っている。

なわとびについては，毎週月曜日及び水曜日に実施。短縄，長縄を組み合わせで行っている。

エアロビクスについては，各教室でビデオを見ながら行っている。

ジョギングについては，台湾 1 周を目標に行っている。記録は電子化したシートに，児童自身が記入できる形にしている。

ポイントを集めるというしかけをしており，児童の活動に対する意欲はとても高い。校長先生自身も一緒にジョギングをするなど，児童の意欲が継続する工夫をしている。

(2) 体育授業について

○ 学年：5 学年児童 27 名

○ 指導者：経験年数 3 年目（非常勤 1 年，新規採用から 2 年）体育専科教員

○ 授業の様子

本時は，体力強化（体力測定を含む）の中のフープを使った動きづくりをねらいとした授業であった。雨のため，屋内のスペースを利用した授業であった。フープを回しながら跳ぶ，跳び



ながら走るなど、用具を操作しながら巧みに体を動かす楽しさを味わえるように活動が工夫されていた。

チームに分かれ、フープに体をくぐらせながら順に送っていく活動では、「どうやったら早くフープを送っていけるか?」と児童に問い、考えさせ、出てきたアイデアを全体に広めていた。

また、グループで早くフープを送るための作戦を立て、試してやってみる活動を組むなど、思考したことを試行する活動を取り入れられていた。

子供たちに体を動かす楽しさを伝えたい、巧みに用具を操作することができるようにさせたいという教師の意図がみえる授業であった。



#### 6) 主な質疑応答の内容

Q1: SH150 プログラムを1週間に150分行われているということだが、先生方に負担感はないのか?

A: どうやっても負担はかかる。先生方も正直、負担感を感じている。行政的な面（施設面の整備等）、指導面と分けるようにし、先生方には指導面の役割を担ってもらっているようにしている。

Q2: SH150 プログラムの4つの内容は、先生方が独自で決められたものなのか?

A: 活動場所など施設の条件、子供たちの実態などから、先生方が決めた。

Q3: SH150 プログラムの取組で、子供たちの中に見られるよい変化があれば、教えてほしい。

A: 取組の検証を行っていないので、客観的なデータはないが、子供たちは、スポーツの楽しさ、体を動かす楽しさを十分感じていると捉えている。

Q4: 台北市の小学校では、課外活動として、バスケットボールや太極拳などの活動を行っていると聞いたが、本校でも行っているのか?

A: 本校には、12のグループがある。スポーツはもちろんのこと、文化的な活動も行っている。しかし、約9割の児童が放課後、塾に通っており、参加する児童が減少している。

Q5: 今日の授業の出来映えはどうであったか?

A: 本時の授業では、スポーツの楽しさを伝えるというねらいをもって授業に臨んだが、このことについては、児童に伝わったと思うし、しっかり体験させることができたと思う。体を使い、頭を使い、総合的に力を高めていくことをいつも大切に授業を行っている。

#### 感想・気づき等

体育授業の充実とともに、運動・スポーツの楽しさを味わえるようにするための学校全体での活動をうまく仕組みられていた。学校の施設を有効に使い、楽しく体を動かす活動や、活動に対する意欲が継続するようなしかけなど、すぐに取り組みそうなアイデアを得ることができた。

小学校特有の課題として、体育の専門的な知識をもっていない先生方に対して、どのような授業づくりを行っていけばよいか、体育でどのような力を培っていけばよいか、理解を図ることとあった。また、

教員の研修の在り方について考えていく必要があるという話もあったが、これらは共通の課題であると思った。

教えて考えさせる、思考したことを試行するといった授業スタイルは、日本とよく似ていた。体を動かす楽しさを十分に味わえるようにすること、そして、思考・判断する力を培っていくためには、単元計画の中に、意図的・計画的にバランスよく組んでいくことの大切さを再確認した。

(文責：清田美紀)

## 2. 中学校

1)視察先： 新北市立鷺江國中学校

2)日 時： 2016年3月18日(金)午後13:30～16:00

3)説明者： 校長 謝承殷 他

### 4)視察先概要

新北市立鷺江國中学校は、台北市西部に隣接する新北市蘆洲区に2002年に創立された比較的新しい学校である。全校生徒数は約1500人(各学級約30人、3学年で50学級)である。130人の教職員が在籍し、その内28%の教師が教育学修士を有する。学校長は後述する新北市の保健体育研修チームの代表を務めている。週1回のクラブ活動では、全生徒がいずれかの運動クラブに所属し活動している。運動部活動では、カンフーの武術大会で表彰される生徒が多い。

体育授業は学校に隣接するスポーツセンター(新北市蘆洲國民運動中心)で実施している。球技体育館、プール、フィットネスジム、ダンスレッスン室、児童プレイルーム、クライミングウォールに加え、屋外の全天候型トラックを備える施設である。スポーツセンターの用地は学校の所有地であり、建設費は区の補助を受けている。施設の管理運営は民間業者に委託されている。平日の日中は学校の授業で優先的に使用でき、夕方以降は一般利用者にも開放され多種の運動プログラムも開催される。学校の敷地からは一般利用者とは別の専用入口を使って出入りすることができる。



### 5) 説明等の内容

#### (1) 研修組織について

訪問校のプレゼンテーションの内容は主に新北市の保健体育研修チームの活動の紹介であった。新北市では9地区から1人ずつの保健教育および体育教育の代表教員が研修チームを組織している。研修チームの教師は平均18年の教職経験、研修チーム加入後平均8年の経験を持つ。研修チームは毎週水曜日に集まり研修の実施計画の検討および準備を行っている。また、国立台湾師範大学などの近隣の大学とも連携し研修を行っている。保健領域と体育領域が合同で実施する理由の1つは、技能に偏りがちな体育領域において態度や知識の観点も視野に入れるためである。

研修チームは月に1回程度、保健または体育領域の研修会を開催している。参加教員は、他地区の学校の授業を参観し、所属校や所属地区で新しい授業実践を普及させる。研修会は9つの地区を巡回するように実施されており、参加教員が異なる地区の授業実践を観る機会が得られるよう設定されている。研修会の主題については、各学校のニーズを質問紙で調査した上で内容を検討している。2016年度の研修会は「命の教育」、「バスケットボールの個人差に応じた指導」などの主題で実施されていた。

研修会の進め方は研修チームで検討し試行錯誤しながら実施されている。2012年までは、教師が集まり各々の授業実践例を紹介するスタイルで実施されていたが、2013年からは、午前中に生徒への授業に参加教員が観察し、午後にその授業について討議を行うスタイルに変更されている。2016年5月からは、午前中に参加教員で主題について議論し、午後に生徒に対し授業を実践し成果を検証する方式を試行する予定である。

## (2) 体育授業について

- 対象： 中学1年生、28人（男子14人、女子14人）
- 場所： 球技体育館バスケットボールコート1面（スポーツセンター内）
- 授業時間： 45分間
- 授業者： 陳信宏教諭（体育科研修運営委員）
- 授業の流れ

### マーカータッチ（写真1）

左右交互に置かれたマーカーにタッチしながら前方に走る。マーカーは幅約3m、左右交互に6個設置され、男子生徒の場合は女子生徒よりも間隔がやや広く設置されていた。

### 課題の説明、観察評価票の配布

### ドリブルタッチ&シュート（写真2, 3, 4）

ドリブルしながら4人のチームメイトの手にタッチし方向転換して進みゴール下からシュートする。ペアで互いに観察評価票をもとに技能を評価し合う。

### 1対1ドリブル練習（写真5）

センターサークル内で相手にとられないようにドリブルでボールキープする。

### ドリブル突破ゲーム（7対7）（写真6）

7人で同時にハーフコートラインからドリブルでスタートし、7人のディフェンスをかわしながらゴール下のボールかご（約1m×1m×1m）にボールを入れる。

### ○ 本時の概要

本時は中学1年生のバスケットボールのドリブル基礎技能の習得を課題とした授業であった。男女合同の授業であったが、それぞれ別のハーフコートで分かれて活動していた。

生徒は観察評価票をもとに、ペアの生徒を観察し、互いのドリブル課題の評価を行う。観察評価票の項目は、①左右の手でドリブルチェンジができる、②ドリブルを途切れず続けられる、③顔を上げて進行方向を見てドリブルができる、の3点であった。それぞれ、ペアの生徒の技能を観察し成否を記録する。また、観察評価票の最後には自己評価欄がある。



写真1 写真2

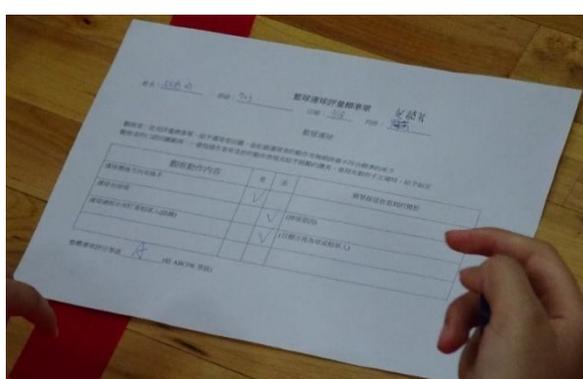


写真3 写真4



写真5 写真6

#### 6) 主な質疑応答の内容

台湾の中学校の体育授業の課題として、小学校の体育授業は、多くが体育を専門としない担任教師により指導されるため、中学校入学時の個々の生徒の能力差をどのように解消するかが挙げられた。また、参観授業の観察評価票の目的について、生徒に自身のドリブルの技能的課題を自覚させることを意図していると説明があった。これは個々の生徒の能力差に応じた指導および学習を行うための工夫である。次に、台湾の教員から日本からの参加者に授業を参観した率直な感想および日本の体育授業との違いがあったかについて質問があった。日本の参加者からは、授業中の生徒の待機時間が気になったこと、日本では1時間の授業における課題に一貫性を持たせることを重視すること、球技では集団の学習に価値を置くこと等が挙げられた。また、中学校入学時の能力差に関しては日本でも同様の課題があること、

そのため中学校 1 年次では小学校の学習内容の復習から授業を始めるといった工夫が紹介された。

## 7) 感想・気付き等

参観した授業では観察評価票を用いてペアの生徒同士での相互観察を行っており、技能のみならず協力や思考・判断の学習を促す意図がみてとれた。また、終盤のドリブル突破ゲームでは、1 ゲームごとに教師からのフィードバックと生徒グループ内での話し合いが行われ、認知学習場面を意図的に設けているようであった。

授業中の生徒の整列や姿勢、素早い移動等については厳格に指導する方針ではなかったようだが、課題の説明等の時間には教師の話を真面目に聞く様子がみられた。ただ、男子生徒の多くは本時の課題が易しいためか、女性生徒に比べて意欲が高まっていない状況もみられた。女子生徒は走りながら挑戦していたのに対し、男子生徒は歩きながら易々とドリブルをしていたが、教師から距離を伸ばしたりスピードを上げさせたりするような促しはみられなかった。もっとも、授業後半の 1 対 1 のドリブル練習からは男子生徒も活発に活動し意欲的に挑戦する姿がみられた。これらの様子から、授業参観後の協議会で台湾の教師から発言があったように、生徒の個人差に応じた指導の手立てや動機づけが課題となっていると感じた。

今回の中学校の訪問では学校の体育授業の全体像について理解が不十分となった点もあった。例えば、参観した 1 単位時間分の授業からは、単元の全体像や本時の位置づけの理解には至らなかった。また、教師からのフィードバックや生徒同士の会話等が多くみられたが、その内容については言語の問題で理解できなかったことも残念であった。

新北市の保健体育科の研修は、複数の学校の熱意のある教師らにより協同的、計画的に行われており、改善を重ねながら継続されていたことが印象的であった。国立台湾師範大学との連携や参加教員の学校内での情報共有をどのように行っているのか等、今後さらに情報を収集することで我が国の授業研究にも有益な示唆が得られると期待される。台湾と我が国の学校体育や生涯スポーツは共通する課題も多いため、今後も継続して情報交換を行っていききたい。（文責 四方田健二）

## 3. 高等学校

1) 視察先：臺北市立中山高級中學 TAIPEI MUNICIPAL ZHONGSHAN GIRLS HIGH SCHOOL

2) 日 時：2016 年 3 月 17 日(木)

3) 説明者：校長 吳 麗 卿 Principal Wu, Lee-Ching 他

4) 視察先の概要



創立 1897 年の台湾屈指の女子教育機関・市立全日制女子高であり、財政界をはじめとする各方面でのトップレディとして活躍する卒業生が多数いる超有名進学校である。場所は台北の中心に近いが、グラウンドも大学並みの整備された 400m トラック、体育館が 5 階建てであるなど、とても広大な敷地を有している。教員数 181 名、職員数 26 名、生徒数約 3000 名である。

## 5) 説明等の内容

### (1) SH150

#### ① 概要

1. 基本理念 → 2. 目標 → 3. 方法 → 4. 運動内容の実現のために、一貫した実践が行われている。1. 基本理念は、学校では多種多様な運動・スポーツを生徒に提供し、基本的な運動能力を身につけさせ、生涯スポーツにつなげられるように、運動を習慣化することとしている。2. 目標は、1 週間に 150 分の運動を行う。3. 方法は、自主性を重んじ、運動した内容や時間などを自己登録し、それが評価されるシステムにしている。その記録表は、簡易的なもので時間をチェックするだけのものにし、それを計算して台湾 1 週するなどの達成感のある目標などを設定している。4. 運動の内容は、体育授業にバレーやバドミントンといったスポーツ種目に加え、特徴的な 4 つの分野として、伝統芸能(台湾ヨーヨーなど)・ダンス(エアロビクス中心)・野外活動(ライセービングや水泳など)・体力測定(ヨガや柔軟など)が行われている。

学校全体として、運動は大切で行うべきものという考えが浸透しており、教科を問わず教員が自ら生徒に見本となるべく運動をしている。

#### ② 体育授業と SH150

生徒が 1 週間に 150 分の運動を行えるように、多種多様な運動を提供している。スポーツ種目は、全体の 50～70%で、バレーボール・ゴルフ・バドミントン・水泳・ダブルダッチを行っており、それに加え特徴的な 4 つの分野は 30～50%で行われている。学校の伝統でもあり、生徒もとても愛好しているエアロビクスは、体育祭に全校生徒で踊ることもあり、その音楽がかかればいつでもどこでも踊ることができるほど行われている。種目の担当教員は、その種目の指導ライセンスを持っている教師が担当している。今後も新たな種類のスポーツを取り入れようと考案しており、クリケットやグラウンドホッケーなどが候補にあがっている。

※台湾の体育教師は、専門種目 2 つの指導ライセンスを取得し、その種目を各学校で指導するシステムとなっている。

### (2) 体育授業

今回は、バドミントン・水泳・ヨガ・エアロビクスの授業を参観させていただいた。どの授業も教材を工夫し、本時の計画や目標など黒板などに明記していた。授業内容に関しては、技能中心にし、その達成感を味わわせるためのスモールステップがあった。



ゴルフ



水泳



ヨガ



バドミントン掲示

## 6) 主な質疑応答の内容

Q1：進学校のため、体育授業ではなくて受験科目の時間増を希望されていないか？

A1：進学は大切だが、体力がないと良い勉強ができないという考え方をしている。体力は勉強の基盤である。体育が学校の基盤をつくっているのではないかとも思っている。教師が熱心に教えているのが生徒に伝わっている。

Q2：生涯スポーツにつなげるためにしかけは？意欲関心を高めるためのしかけは？

A2：地域との連携を大切にしている。スポーツセンターに連れていき、卒業後の運動の仕方などを教えている。体育施設の授業等で使用しているものはいつでも生徒が使用できるように置いている。

Q3：日本では、スポーツの価値を座学で教えているが、台湾では？

A3：スポーツの意義や価値は理論だけではなく、協働学習にしたい。特に見るスポーツを重視しているが、一番大切なのは、「参加」で、自分に合うスポーツを見つけることが生涯スポーツにつながると考えている。

Q4：多種多様なプログラムを提供し、それらを好きにさせていく方法は？

A4：まずは生徒の欲求充足から。欲求充足させれば、その後は何をしてもついてくる。子供の成長のために何ができるのか一生懸命な教師の姿を生徒がみている。教師がそれを実践して師範すること。

## 7) 感想・気づき等

教師が中途半端な知識や技能で授業を行うのではなく、種目のプロフェッショナルとして授業を展開していることが教師行動や指導内容に自信がもてるのではないかと思った。指導内容に自信をもつこと

で、教材研究するにしても授業中の教師行動(言葉かけ)にしても工夫がしやすく、特に運動学習場面における直接的な技能指導につながるだろう。

学校全体で「運動は大切」「積極的に運動に取り組もう」といった雰囲気があり、校長先生はじめとする先生方が積極的であることが、生徒が運動を肯定的にとらえる一歩になっていると感じた。

(文責：大津展子)